● 第10回野外見学会のご報告 ●

南　寿宏

4月25日（日）、吾川村で第10回野外見学会を行いました。吾川村の地質概要については、川澤啓三会長による詳細な報告が「土佐の自然」最新号に掲載されましたので省略しますが、上位から吾川ナップ、中津山ナップ、仁淀川ユニットに大別されます。普通、地層は上位ほど新しい（地層累重の法則）のですが、当地は逆に下位が新しく、断層による地層の逆転が分かっています。これを、専門用語でナップといいます。

さて、当日午前10時30分、県立仁淀高等学校のご好意により、当校を集合・駐車場所としたところ、

40人以上の方が集まってくれました。高知大学の吉倉紳一教授の説明の後、教育センターの竹島洋文先生の指導のもと、仁淀川原で観察を始めます。川原は最下位の仁淀川ユニットに属します。

黒い泥岩の中には緑や白の雑多な岩石がごちゃ混ぜになっているものがあります。竹島先生によると、これがカレーライス岩で、カレールー（泥岩）の中に白いジャガ芋（石灰岩）や緑のグリンピース（緑色岩）が浮かんでいる状態だそうです。「カレーは先に肉やジャガ芋、玉ねぎをいためておいて、それからルーを作るでしょう。つまり、ルーが新しいのです。」といった説明がなされました。

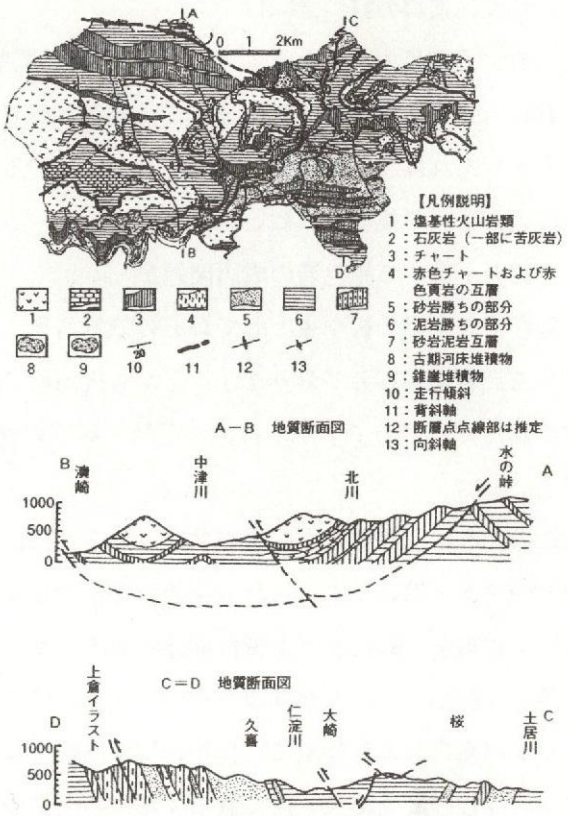

図1　吾川村地質図（川澤原図）

次の観察は化石です。当地の黒っぽい泥岩中からは、三畳紀の代表的な示準化石である二枚貝モノチスが発見されています。参加者総出で探し出したところ、40人の目はたいしたもので、ここそこから発見の歓声があがり、川原は一大ワンダーランド、興奮のるつぼと化しました。

すぐ近くにある石灰岩の表面には、5mm足らずの渦巻き模様があります。これが当地をペルム紀と誤らせていた問題の化石フズリナです。最近の研究で、「ペルム紀のフズリナを含む石灰岩は三畳紀の泥岩中に紛れこんだものである」ことが分かりました。専門用語でオリストリスといいます。

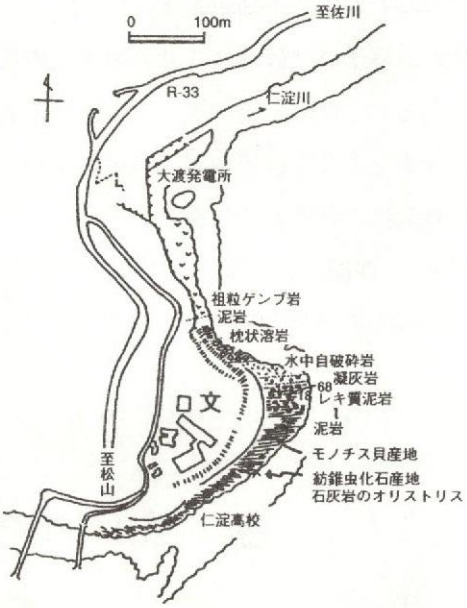

図2　仁淀高等学校周辺ルートマップ（川澤原図）

石灰岩のすぐ横の、直径1mほどの茶褐色をした丸っこい岩石は枕状溶岩（pillow lava）といって、海底火山の噴出物です。枕をいくつも伏せたように、ぼこっ、ぼこっと丸く膨らんで重なっているのが特徴です。この岩石は、はるか南方の太平洋で噴出した溶岩がプレートにのって年間数cmの速さで移動し、四国にくっついてしまったもので、とても珍しいものだそうです。一同感心していると、竹島先生はぐんぐん下流の方向に行きます。何だろうとあわてて追いかけていくと、差し渡し20mはあろうかという巨大な枕状溶岩がありました。先生が指差すところを見ると、まさしく西洋枕（pillow）の形が浮かび上がっているではありませんか。一同、呆然として、声が出ませんでした。

昼食後、大渡ダム公園に移動し、吾川ナップ、中津山ナップを概観しながら全体の説明を聞きまし

た。そこで閉会時間となったのですが、ナップに行きたいという会員の強い希望があり、急拠予定を変更、ナップ見学希望者を募ったところ、ほぼ全員が希望したので、皆で中津渓谷に向かいました。

図3　「これがカレーライス岩で‥‥」

中津渓谷では、ナップを構成している岩石を観察しました。また、断層面の滑った方向の観察方法を試みました。そしてポットホールが半分に割れてできた珍しい滝を見、遊歩道を散策しつつ、満ち足りた思いで家路につきました。

当日の吉倉語録から

「平（朝彦）先生はそれはもう頑固で、最後までプレートテクトニクスを信じようとしなかった。(意外！)」

「石のように寡黙ということばがありますが、間違いです。石は我々に雄弁に語りかけてくれます。ただ、我々がそれを聞き取ることができないだけです。」

（観察終了後、仁淀村より広報用に原稿依頼があり、作成して送付。当原稿はそれを流用した。）